初代東京天文台長寺尾壽博士と3人の弟たちの奮闘記

The first president Dr. Hisashi TERAO of Tokyo Astronomical Observatory and his excellent brothers

藤野清次 (Seiji FUJINO)[†1]　友枝喜三郎 (Kisaburo TOMOEDA)[†2]

概要：
本研究の発端は，1990年代中頃共同研究者の**友枝**氏が，外交官森安三郎の長男の**森久弥(きゅうや)**氏から，森家と寺尾家の家系図作成に協力を依頼されたことに端を発する．森久弥氏は寺尾壽の娘敦子の子供，つまり寺尾壽の孫にあたる．森氏は東京育ちで海外勤務も長かったため，福岡にはあまりなじみがなかった．そこで福岡在住で旧知の友枝氏にこの調査を依頼された．当時はまだ情報公開制度がまだなかった時代であったので，戸籍調査等も割合楽であったし，関係者もまだ存命な人が多数おられた．そのため，現在では無理であるような寺尾壽やその兄弟達に関する証言や記録発掘なども可能であった．それから20年あまり経過し，収集した有用な情報や資料なども拡散する恐れも出てきたため，本研究をまとめる最後のチャンスと考え，研究会資料として後世に記録を残すこととした．

キーワード：寺尾壽，東京天文台長，金子堅太郎

1. はじめに

写真1　寺尾壽の娘　敦子の結婚写真
前列右より、新郎：森安三郎、寺尾壽の母：寺尾愛子、寺尾壽夫人：寺尾駒子、新婦：敦子、後列右より、元内閣総理大臣（当時は新郎先輩）：広田弘毅、新郎の先輩：山座円次郎、新婦の父：寺尾壽、新婦の叔父：寺尾亨、新婦の兄：寺尾新

図 1　寺尾家(明治(M)40-41年頃)結婚式
寺尾壽の長女敦子(前列左)と森安三郎(前列右，イタリア・チリ大使)の結婚，後列左は後に総理大臣廣田弘毅，同2人目外務局長，中華全権大使山座圓次郎，同3人目東京天文台長寺尾壽．同4人目東大教授寺尾亨．

調査の初期段階で図1の非常に珍しい写真が見つかった．提供者は学士院会員で九大名誉教授の秀村選三博士の親族の方からであった．寺尾壽の母堂愛子さまがキリスト教を信仰されていた関係でこの写真が現代まだ伝わったのであろうという推測であった．因みに秀村先生(大正11年生まれ)もキリスト教を信仰されておられる．また，その後の調査で寺尾壽は男4兄弟の長男で，3人の弟たちも活躍した分野こそ異なるが一角の人物であることがわかった．そこで，本研究では，これら3人の弟たちの生涯にもスポットを当てて記録に残す価値が十分にあると考え，調査を開始した．ただ，3男と4男は寺尾家から澄川家と小野家にそれぞれ養子に出されたため，本人の写真も所在不明であった．

- 寺尾男4兄弟の略歴
  - 寺尾壽(ひさし)(1855.9.25-1923.8.6) 東京天文台長，理学博士，東大教授
  - 寺尾亨(とおる)(1859.2.1-1925.9.15) 東大法卒，法学博士，東大教授
  - 澄川徳(めぐむ)(1861.7.18 - 1926.12.不明)　東大医学部卒，医学博士
  - 三木(小野)隆太郎(1864. 12.23-1909.7.21)　東大法卒，市議，県議，弁護士，台湾総督府法院判官

2. 寺尾兄弟の誕生

2.1 兄弟が育った福岡の街の紹介

福岡市中央区春吉は，今でこそ飲食店などで賑わう下町の繁華街であるが，街が出来た当初は福岡藩の下級・中級の武士が生活していた街だった．

---

†1 九州大学名誉教授，Professor emeritus at Kyushu University
†2 藤香会

そのため，静かな小さな住宅地という雰囲気も醸し出していた．1911年に誕生した九州帝国大学初代総長は山川健次郎氏であった．単身赴任であったため，赴任当初は福岡市橋口町(現在の天神北)の栄屋旅館に滞在された．図2(右)に山川総長から桑木あや雄九大教授への封書裏面を示す．また，図2(左)に下宿先住所「筑前国福岡市外春吉**六番丁**」からの封書裏面を示す．

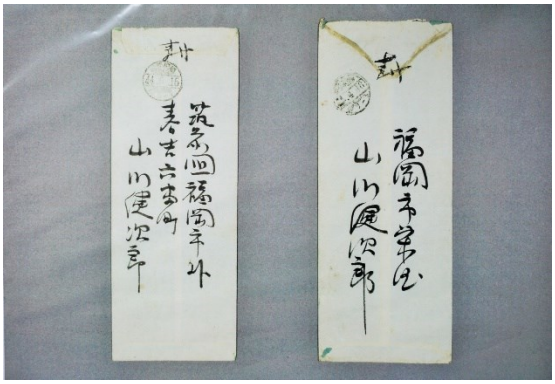


図 2　山川健次郎初代九大総長の手紙(M44年)
(左)下宿先:「筑前国福岡市外春吉六番丁」より
(右)福岡に赴任して最初の手紙「福岡市栄屋」より．
早稲田大学図書館所蔵「桑木あや雄文庫」．

さて，春吉の寺尾家当主は寺尾喜平太，その妻愛子，そして賑やかな子供たち六人(四男二女)の大家族であった．長男壽(ひさし)は利発な子で藩校修猷館に入学するとたちまち頭角を表した．同級生に同じく秀才の金子堅太郎がおり，「東の寺尾，西の金子」と噂された．金子は黒田候から米国留学を命ぜられ，ハーヴァード大学法学部に進学し法律を学んだ．一方，寺尾壽は明治6年東京外国語学校に入り仏語を学び，翌7年開成学校に転じ，次いで東京大学理学部に進み，十一年首席で卒業した．

図 3　寺尾壽東大教授の肖像画(黒田清輝作)

そして理科コースを首席で卒業し，学者の道を歩み始めた．図 3 に寺尾壽の肖像画を示す．これは画家黒田清輝が描いた作品である．

次男の**亨(とおる)**も藩校修猷館を卒業後，兄壽を頼って上京し，法務省法律学校の第 2 期生に入学．その後東京大学法学部を優秀な成績で卒業し，東大で職を得ていた．図 4 に法務省法律学校時代の卒業記録を示す．

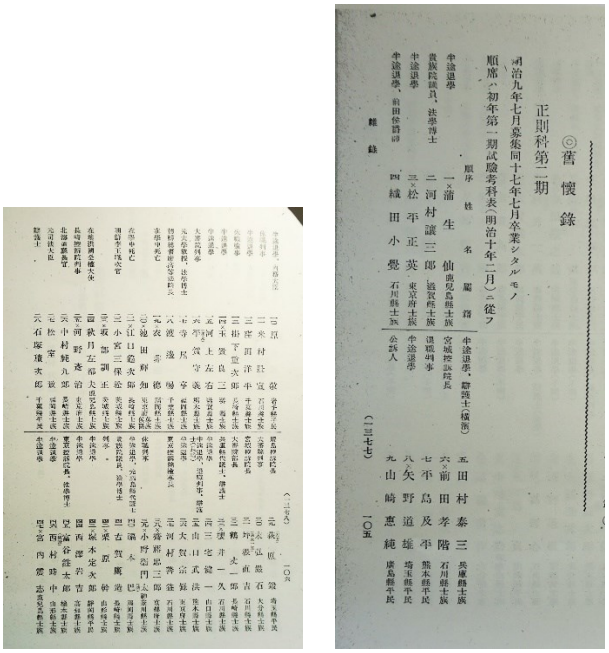


図 4「法曹記事」(第 24 巻第 1 号，大正 3 年 1 月)

しかし，長男壽が上京して 4 年後，父喜平太が病気で亡くなった．享年 47 歳であった．兄壽とすでに帰国していた親友金子堅太郎は亨の将来を心配し，東大の上層部と交渉し，亨を黒田家の費用で欧州の大学に 3 年間留学させる段取りを取りつけた．同時に亨の帰国後は東大法学部に国際法の講座を新しく設けることも当局とすでに了解済みであった．

図 5 東大教授時代の寺尾亨

そして，留学先のフランスで亨も国際法の権威の教授たちとの交流を通じて研鑽を積んだ．帰国後東大法学部で教授になり，日本で最初の国際法の研究室を立ち上げた．図 5 に東大教授時代の寺尾亨の写真を示す．

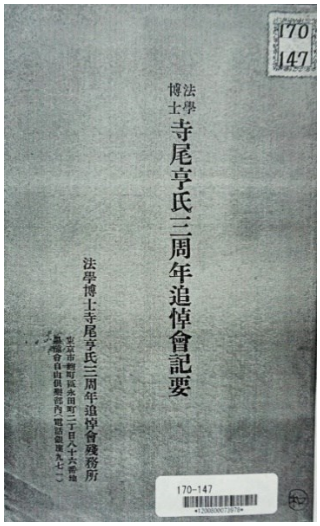


図 6「寺尾亨三周年追悼会記要」(昭和 3 年)

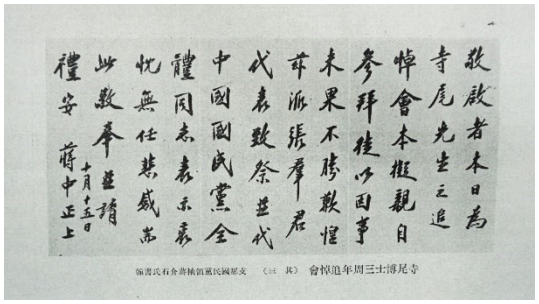


図 7 蒋介石氏書翰(寺尾亨追悼会，昭和 3 年)

1903 年（明治 36 年）6 月には，有名な七博士意見書において，ロシアとの早期開戦を唱えた．早くからアジア主義を唱え，孫文やビハリ・ボース等の支援にあたった．特に，孫文が辛亥革命を起こした際には，帝国大学教授の職を捨てて孫文の補佐にあたり，孫文が日本に亡命した後もこれを支援した．図 6 に寺尾亨三周年追悼会記要の本の表紙を，図 7 にその中に収められている蒋介石氏からの書翰を示す．

一方，長男壽も順調に学者の道を歩み，東京大学教授，フランス官費留学，日本最初の理学博士，そして若くして初代の東京天文台長に就任した．また，数学教育においても定評を得ていた． 図 8 に中学教育で定評のあった「算術教科書」の表紙を，図9に西洋の最新スポーツを日本に紹介した「西洋戸外遊戯法」の序文を執筆するなど文化普及活動にも非常に熱心であった．また，図 10 に壽らが創設した東京物理学校の校長にも就任し，卒業証書などが残っている．

図 8 中学教育「算術教科書」(寺尾壽編纂)

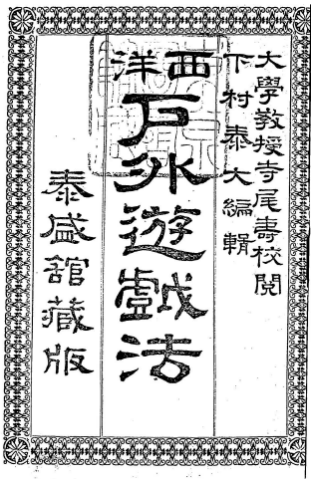


図 9「西洋戸外遊戯法」(寺尾壽校閲)

注)西洋戸外遊戯法 下村泰大／編東京：泰盛館，編者は埼玉県平民．序文を寺尾寿が書く．Frederick William Strange 著 Outdoor games(Tokyo：Z. P. Maruya，1883 年)の抄訳．pp.16 -19「フート，ボール（蹴鞠）」あり．

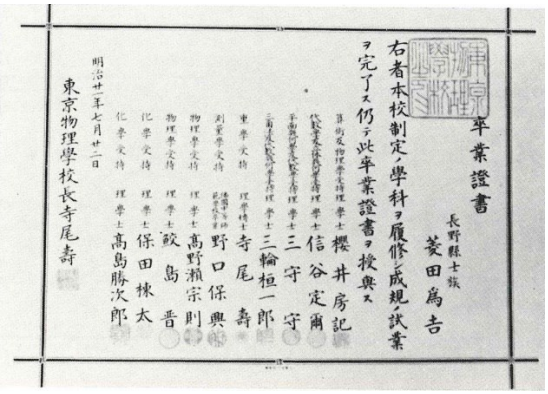


図 10 東京物理学校の卒業証書（校長寺尾壽）

壽の東大教授就任 25 周年記念会でも多くの著名人の出席を得て盛大に行われた．したがって，壽と亨の寺尾 2 兄弟については，多くの著作や文献等もあり，広く知られていることが多い．

3. 三男小野隆太郎の略歴

長男壽が東大に職を得た頃，寺尾家は愛子を始めとして一家全員が上京したことは既に触れた．ただし，四男だけは既に三木家に養子に入っていた．養父は**三木隆助(たかすけ)**で，養父の意向もあり，**隆太郎**と名を変えた．寺尾家の子供の名前は全員 1 字だったが，隆太郎だけは幼名の記録がはっきりしない．さらに，三木隆助が名字を変えたので，養子の隆太郎も**小野隆太郎**と呼ばれるようになった．小野家はその祖先が小野妹子(いもこ)に繋がる名家であった．隆助は大宰府天満宮の神職も務め，衆議院議員や勅撰香川県知事も務めた．太宰府の長官(帥，そつ)は，806 年に伊予親王がなられて以来親王が長官を務めるようになったが，赴任はしないので，実際の事務は太宰大弐がつかさどった．この太宰大弐に代々小野家がなっている．ここに小野氏が住みつくようになったのは 958 年(村上天皇天徳 2 年)道風の孫，道好からである．道風は小野妹子から 8 代目，道好は 10 代目，道風は東小野の流れの祖とされる．そして東小野の系譜は，道風に始まり，隆助が 31 代目，隆太郎が 32 代目にあたる．

養子の隆太郎は，兄亨と同じように，法務省法律学校の第 3 期生に入学し，その後東京大学の法学部を卒業し，弁護士，福岡市会議員，同県会議員，台湾総督府法務官などを務めたが，台湾で病気に罹り兄弟の中で最も若く 1909 年福岡で亡くなった．まだ若く享年 45 歳であった．

図 11 台湾総督府時の礼服姿の小野隆太郎

小野隆太郎の写真が未発見であったが，末裔の小野揚子さん（太宰府の小野東風軒店主）の家で隆太郎の(礼服姿の)写真が発見された．また，養子に到るまでの経緯，台湾総督府での判官活動なども明らかになった．図 11 に台湾総督府時代の例服姿の小野隆太郎の写真を示す．図 12 に養父小野隆助の記念碑の写真を示す．小野隆助氏の明治維新時の官軍での大活躍，藩校修猷館再興のときの資金支援など旧福岡藩(黒田家)に対する功績が大なることを高く評価されたものである．

図 12 正五位小野隆介君碑(表面は黒田長成候による書，裏面は子爵金子堅太郎による書，設置場所は太宰府天満宮境内)

小野隆太郎の略歴は以下のようにまとめられる．

寺尾喜平太の四男，13 歳の時三木家に養子．
名は三木隆太郎となり，司法省法学校正則第 3 期生として 1880(M13)年 9 月入学．1883(M16)年 10 月東京大学法学部卒業．その後，養父の小野隆助の改名により，小野隆太郎となる．
1888(M21)年，代言人(明治時代の弁護士の旧称)免許
1892(M25)年，福岡市市会議員
1896(M29)年，福岡県県会議員
1901(M34)年，台湾総督府法院判官(M42 年 5 月まで台南地方法院，台北地方法院に務める)
1909(M42)年 7 月福岡で亡くなる．

隆太郎の小野家への養子のいきさつについては以下の証言が残っている．

「隆太郎先生が小野家に養子に入られる事に就きて私の父（末永茂世）がお世話しました．そ

の関係で隆太郎先生は私の家にはよくお出でになりました．長男壽先生のことはよく存じませんが，澄川先生も亨先生も隆太郎先生も揃って御酒が中々好きでありました．ご兄弟中も睦まじき方々でありました．」

「法学博士寺尾亨氏三周年追悼会記要」
末永節，昭和 3 年.

注)末永節(1869-1960)：日本の政治運動家・武道家．国学者，歌人でもあった末永茂世(しげつぐ)の二男.

4. 澄川徳(めぐむ)の略歴

三男**徳**に関する調査は情報が乏しく難しかった．職業が医者だったので経歴だけは記録がはっきり残っていた．徳は医学予備門に入学し，東京大学医学部を卒業した．その後，小倉市立病院長に就任しても，研究心旺盛でドイツ留学を志しその目的に向かって日々研鑽した.

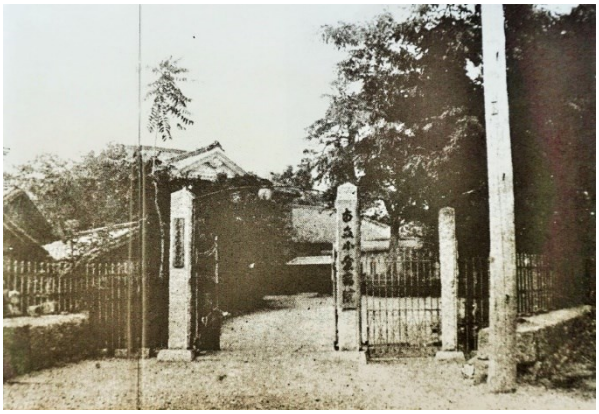


図 13 福岡県企救郡立小倉医学校兼病院

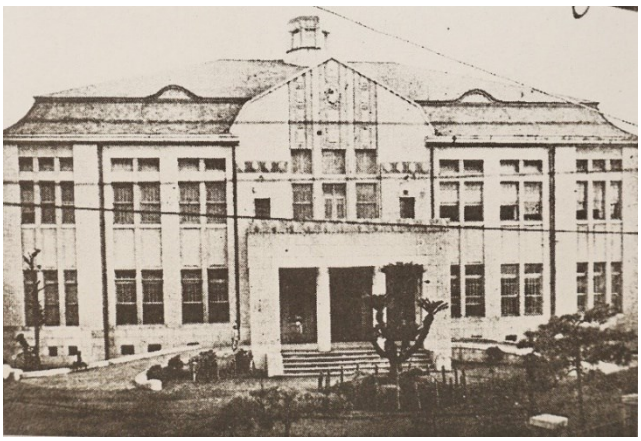


図 14 小倉市立医病院

図 13 と図 14 に小倉医学校および小倉市立医病院の写真を示す.

また，以下のような医師学会での活躍記録も残っている.

第 3 回九州医学会開催（明治 27 年 4 月 1 日）
福岡市東公園，懇親会(明治 27 年 4 月 3 日)

「時に小倉病院長　**澄田医学士**は会員惣代として委員の労を謝し，且つ壇上に立って九州医学会万歳を三呼し会員之に和す．その声百雷の一時に轟くが如く，．．．」

福岡市医師会史(昭和 43 年 11 月 9 日発行)より

ちょうどその頃，小倉の陸軍師団に軍医部長の森林太郎が赴任してきた．澄川徳が森とは同じ東大医学部出身ということもあって，二人は意気投合，お互いに交友が始まった．図 15 に赴任直前の東京でも森鴎外の写真と小倉勤務時の名刺を示す.

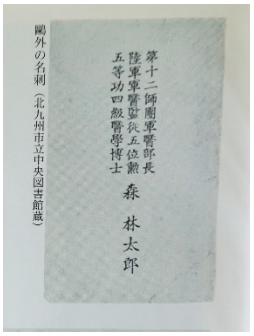


図 15 小倉に赴任直前の森鴎外と小倉での名刺

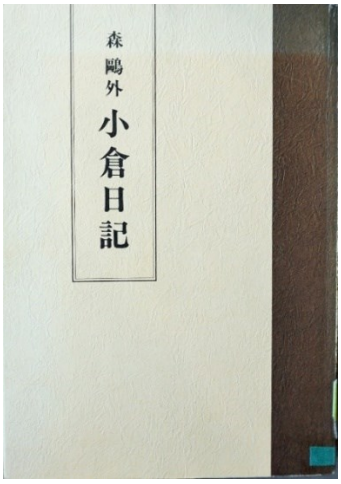


図 16 森鴎外の「小倉日記」

森は東京勤務に戻った後，二人の交友を「小倉日記」として出版した．その日記の中で以下のように書き残した．

明治 32 年 6 月 16 日　：
森鴎外新橋発小倉へ向かう．

明治 33 年 1 月 03 日　：
夜郡病院長**澄川徳**至る。酒を飲ましむ.

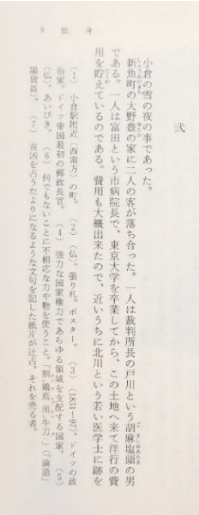
明治 33 年 2 月 07 日　：
澄川徳牡蠣の殻あるもの一籠を寄せ,

明治 33 年 10 月 21 日: 書を馳せて**澄川**を招く

明治 34 年 5 月 08 日　：
澄川徳将にドイツに往かんとす.

明治 35 年 3 月末　　：森鴎外東京へ戻る.

注）森鴎外：M32 年 6 月，第 12 師団軍医部長で赴任，M35.3 迄，小倉で勤務.


式

小倉の雪の夜の事であった。新魚町の大野豊の家に二人の客が落ち合った。一人は裁判所長の戸川という胡麻頭の男である。一人は富田という市病院長で、東京大学を卒業してから、この土地へ来て洋行の費用を貯えているのである。費用も大概出来たので、近いうちに北川という若い医学士に跡を

注　小倉紀行文（西南方）の町。（2）（仏）張り札。ポスター。（3）（1821－32）。ドイツの政治家。ドイツ帝国最初の郵政長官。（4）強力な国家機力であらゆる領域を支配する国家。（5）（仏）。あいびき。（6）何でもないことに不相応な力や物を使うこと。「鶏鳴狗盗」（『論語』）。（7）吉凶をうらなったりになるような文句を記した紙片が付属。それを売る者。

図 17　短編「独身」の一節

さらに，森は短編「独身」(明治 43 年発表，図 17 参照)の中でも，**澄川徳**は小説中では市病院長の富田で登場させ，二人の交友をモデルにした小説を書き表した.

森鴎外短編小説「独身」より　明治 43 年発表

「小倉の雪の夜の事であった．新魚町の大野豊の家に二人の客が落ち合った．一人は裁判所長の戸川という胡麻頭の男である．一人は**富田**という市病院長で，東京大学を卒業してから，此の土地へ来て洋行の費用を貯えているのである．費用も大概出来たので，近いうちに北川注）という若い医学士に跡を譲って，出発すると云っている．**富田**院長も四十は越しているが，まだ五分刈頭に白い筋も交らない．酒好だということが一寸見ても知れる，太った赤ら顔の男である．」
注)戸上駒之助：明治 34 年 9 月 7 日市病院着任

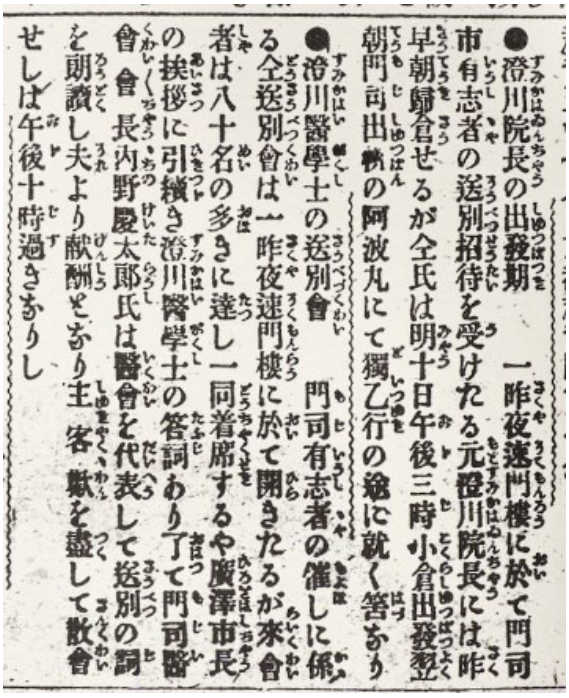

●澄川院長の出發期　一昨夜速門樓に於て門司市有志者の送別招待を受けたる元澄川院長には昨早朝歸倉せるが仝氏は明十日午後三時小倉出發翌朝門司出帆の阿波丸にて獨乙行の途に就く筈なり
●澄川醫學士の送別會　門司有志者の催しに係る仝送別會は一昨夜速門樓に於て開きたるが來會者は八十名の多きに達し一同着席するや廣澤市長の挨拶に引續き澄川醫學士の答詞あり了て門司醫會會長内野慶太郎氏は醫會を代表して送別の詞を朗讀し夫より献酬となり主客歡を盡して散會せしは午後十時過ぎなりし

図 18　澄川病院長ドイツへ出発の門司新報記事

澄川徳病院長がドイツ留学に出発する盛大な送別会の様子が門司新報に残っている(図 18 参照).

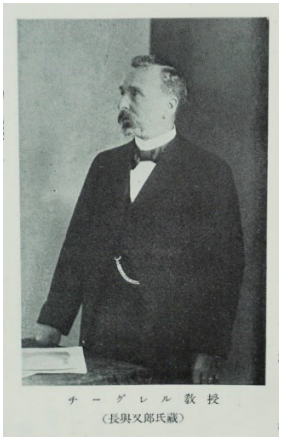

チーグレル教授
（長與又郎氏藏）

図 19　Freiburg 大学医学部 Ernst Ziegler 教授

留学先は，まずドイツ国ベルリン大学に短期滞在しそして最終的にフライブルグ(Freiburg)大学のZiegler 教授の研究室で病理学の研究を行った．
帰国後，東大の病理学の三浦守治教授研究室で学位論文を書き，医学博士号を明治 45 年 3 月 25 日付で取得した(官報第 8626 号)．

5. 難航した澄川徳(めぐむ)氏の写真探し

一般に，キーワードや文章探しは，検索キーなどと連動し調査も比較的楽である場合も多い．しかし，写真については，寄贈物の場合は目録などに写真であると表記があるが，文章中で掲載された写真については検索キーなどに登録されていない．そのため検索できず，そのため調査に時間と手間がかかることが多い．調査も「しらみつぶし」に文献に当たるしかよい手段がないように思われた．本研究でも，澄川徳氏の写真探しが難航した．

まず，東京大学医学部創立 150 周年記念「医学生とその時代」がおおよその目安を立てるのに役に立った．次に，医学博士の論文探しを行った．これにより，「病理学」という教室と指導教官が三浦守治教授であることが判明した．これらの事実から，最終的に決め手となったのは，図 20 に示す「東京帝国大学病理学教室五十年史」が上下 2 巻発行されていることであった．その分厚い本の中に，図 21，22 に示す教室員の或る時の集まりの中に澄川徳氏の写真が収められていた．偶然であるが幸運もあった．それは医学予備学校の時代からクラスメートであった山極勝三郎氏(図 27 参照)が病理学教室の第 2 代教授になった事である，そのため，山極教授関係の写真が見事に収集され整理されていた．その写真の中に同級生澄川徳氏の姿が必ずあった．

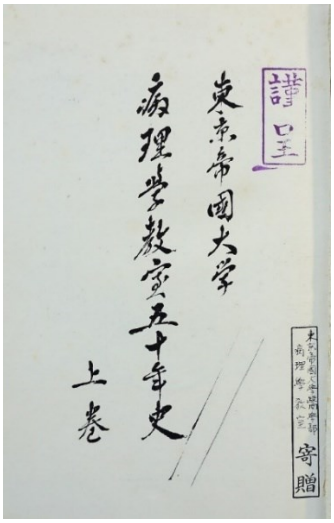


図 20 「東京帝国大学病理学教室五十年史上巻」

図 21 明治 38 年夏教室員記念撮影（前列右 3 人目澄川氏）

図 22 明治 39 年山上御殿付近に於ける教室員記念撮影（左から 5 人目澄川氏）

図 23 明治 14 年東京大学医学部予科生同級生

図 24　明治 21 年 11 月，山極先生と同級生卒業記念写真

図 23，24 の写真から澄川徳氏が特定できた．また，後述の図 29，30 からも大勢の出席者の中から澄川氏を特定できた．このような幸運が重なり，無事澄川徳氏の写真がおよそ 90 年ぶりに日の目を見ることができた．

図 25　広島県立病院創建時の正門と本館建物（大正 4 年）

福岡藩医澄川家について

- 安永分限帳（1772-1781）澄川元信（150 石）
- 天保分限帳（1830-1844）澄川春暉 小児医(220 石)　荒戸通り丁
- 安政分限帳（1854-1860）　澄川玄信 小児医(220 石)　荒戸通り丁
- 同　澄川元岱(信)小児医(230 石)通丁
- 明治分限帳（1868-1870）澄川春吉郎 城代組 小児医（240 石)荒戸通り丁

図 26 に明治初頭の福岡市の荒戸付近の住宅地図を示す．確かに澄川家が載っている．この地域には福岡藩の中級・上級武士のお屋敷が集中していた．

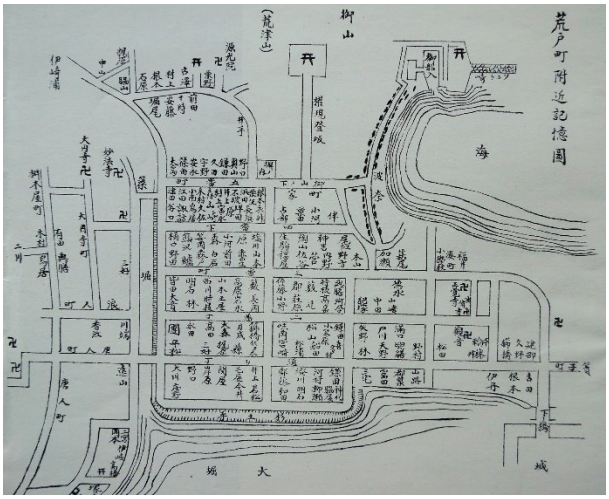


図 26　明治初期の福岡市荒戸町付近の住民地図

澄川氏は，医学博士を取得後，若松病院長，広島県立病院(図 25 参照)長，その後独立し広島市内で澄川内科医院を開業した．そして兄弟の中で最後に 1926 年亡くなった．享年 67 歳であった．

図 27　東大病理学教室第 2 代教授山極勝三郎

図 28　東大病理学教室員記念(明治 39 年)
ただし，これらは図 21 と図 22 の拡大図である．

図 29　山極先生在職 25 年祝賀記念の会，於上野精養軒（大正 6 年 4 月 6 日）

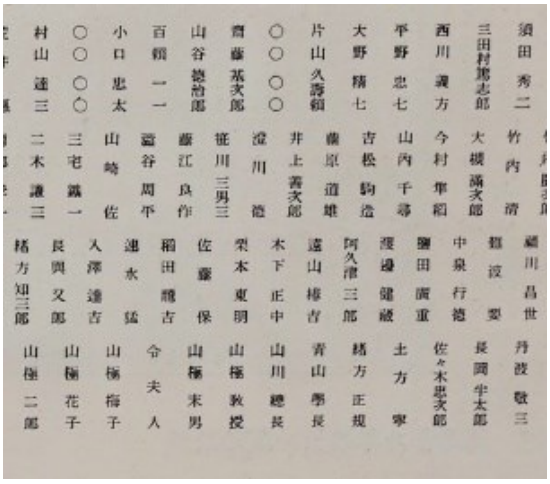


図 30 山極先生在職 25 年祝賀記念の会，於上野精養軒での写真の人物表(山川総長，山極教授が写る写真中央部分，大正 6 年 4 月 6 日)

6. おわりに

幸運も重なり，当初の研究目的であった寺尾壽，寺尾亨，澄川徳，小野隆太郎の四兄弟の略歴と本人たちの写真を後世に伝えることができた．やはり，皆すごい兄弟達であった．

謝辞
発表の機会を与えて頂いた国立天文台　相馬充，谷川清隆両氏に感謝の意を表したい．また，調査に熱心にご助言，ご協力頂いた九大名誉教授の秀村選三先生，太宰府小野東風軒小野揚子さま，寺尾隆さま，澄川敦さまを始め多くの研究協力者の方々に心より感謝の意を表す．

参考文献は本文中に記したのでここでは省略する．

付録:

山川健次郎(1854.9.9-1931.6.26)：会津藩士．イエール大学学位．日本初の理学博士(1888)．東大，京大，九大初代総長．九工大初代総裁．旧制武蔵高等学校校長．

以下に補足写真や資料を追加する．

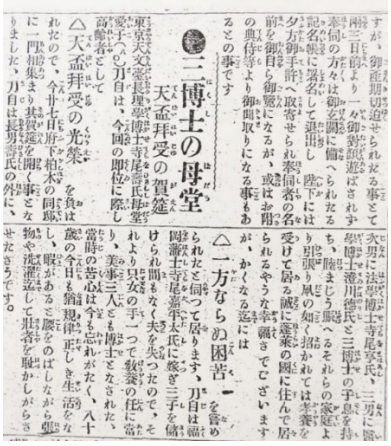


図 31　寺尾愛子(80 歳)刀自の敬老表彰．1915 年 11 月 27 日読売新聞より

図 32　崇福寺の寺尾愛子のお墓(キリスト教式)

図 33　春吉・清川今昔物語の表紙(森政太郎著，1860 年)

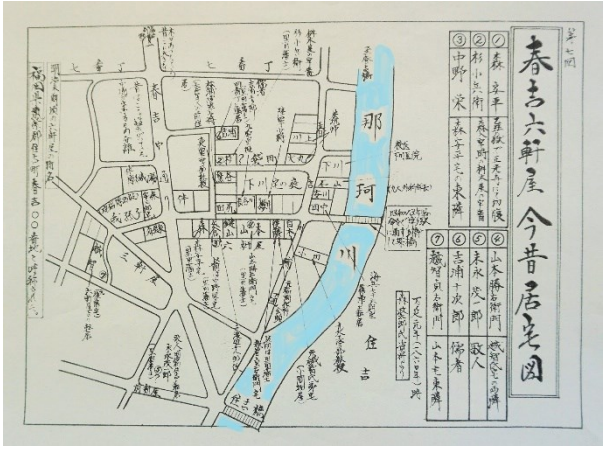


図 34　「春吉六軒屋今昔居宅図」(図 33 の著書に在中)

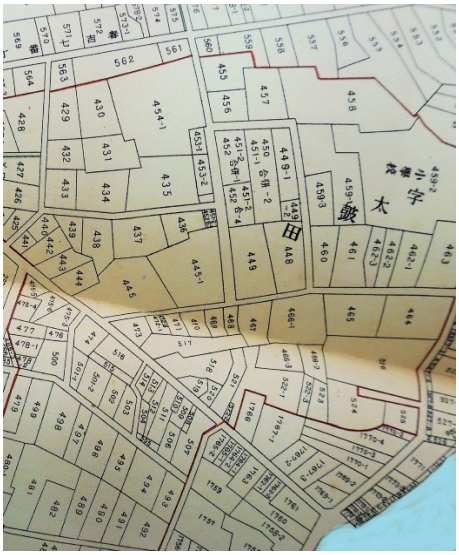


図 35　春吉六番丁付近の番地図(昭和 13 年頃)

図 36　春吉三軒屋付近の住宅図(昭和 13 年)
寺尾家の屋敷はその後柿崎，屋成家の屋敷になった．

「山座少年」小野隆助談（大正 3 年 6 月 1 日，九州日報所載）

「**山座**は雨中を裸足のまま福岡から五里余の路を踏んで宰府まで訪ねてきた．（中略）**山座**の頼みを容れて東京に連れて行き，親戚の**寺尾壽**の許に書生として置くことに頼んで帰った．（中略）

山座が寺尾へ書生となってからは寺尾の老母が勝気の方だから，無頓着な**山座**にとっては老母の教育が随分つらかったろうが，また一面**山座**の人物ができた一因は寺尾の老母の元気な賜物とも言える」

図 37　山座圓次郎と寺尾愛子(図 1 の拡大図)

「寺尾壽」寺尾新による記，著書『父乃書齋』に収録(三省堂刊，1943 年)

- 「柏木(新宿区西新宿 5-6 丁目あたり)に移転してからは，日本風家屋の二階の八畳間が，父の書斎となっていた．この部屋には，作りつけの書棚があって，フランス文学や和漢の古書が入れてあった．その頃から，父の国語学，国文学に関する読書が本格的になって，．．．」
- 「**大正十二年**，父が没した後，九州帝大の図書館長がわざわざ伊東に来られ，父の蔵書を詳細に点検して行かれ，ぜひ新設の法文学部のために譲り受けたいとの懇望だったので，『図書館などに一纏めにしておきたい．あれだけあれば，国語国文学の研究は一通り出来るから』との父の遺志通りに『**音無文庫**』と銘を打った和漢書はそっくりそのまま九州帝大へ納めたのである．．．」
注)音無川:現在は(伊豆，伊東市の中央を流れる)**松川**と呼ばれる．
- 「国文学者になろうとして，若い修業時代にはその機会を得ず，この方面なら頭角を現すことが出来たろうに，といつも父は残念がっていたが，．．．」

図 38　九州大学図書館所蔵 「音無文庫」の一部(寺尾壽，寺尾光寄贈，12000 冊以上)

図 39 森久弥氏(後列右 2 人目)と廣田弘雄氏(廣田弘毅長男，同 3 人目)　昭和 11 年浩浩居にて

図 40　寺尾家の墓(青山墓地)

最後に外交官森安三郎敦子の子供たちによる祖父壽の最後の様子をお伝えして本稿を終わる．

「壽は退官後，伊豆伊東東玖須恵に別荘を建て，悠々自適の日を送っていた．大正十年四月東大病院に入院し胃の手術を受けたが，経過良好とのことで退院し，健康を回復しつつあったようであるが，その後容態急変し，大正十二年八月六日不帰の客となった．病名は胃癌享年六十九才であった．当時私(森久弥)は暁星小学校五年生，妹の綾子，露子は共に聖心女子学院小学校に在学中で，三人共親元を離れて寄宿舎生活を送っていたが，夏期休暇を利用して父の任地山東省青島に帰省するところであった．両親の許に帰る直前，伊東に祖父を見舞い枕許で挨拶した．祖父は，しっかり勉強して立派な人になるように，という意味のことを訓示されたがそれが最後のお別れであった．」

国立天文台寺尾文庫所蔵「母方の先祖　寺尾家のこと」より引用．

本論文は次の研究集会で発表された．
研究集会：第 5 回「歴史的記録と現代科学」，
幹事：相馬充，谷川清隆
日程：2018 年 3 月 22 日(木曜)～ 24 日(土曜)
国立天文台(三鷹)中央棟 1 F 講義室，大会議室
藤野清次，E-mail: seiji.fujino@gmail.com
〒810-0044 福岡市中央区六本松 3 丁目 16-27-301(自宅)